

## かかりつけ医の考えていること ーがんとの関わりについてー

ゆとりが丘クリニック 高橋 邦尚

私のがんという疾患との長い関わりの中で、がんに対する医療者の考えも、患者さんの側の意識も、近年大きく変わってきたことを強く感じています。

この変化は医療技術の進歩そのものよりも、多くの医療情報が患者サイドに行き渡るようになり、患者さんが医療者と同じ舞台に立って自分のがんに対する向き合い方を決めざるを得なくなった、という点が以前との大きな違いであるように思います。

私は自分が大切と考える4つのことを患者さんにお話ししていきます。

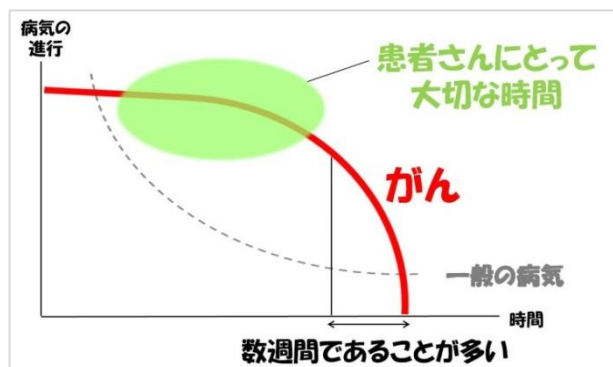
### ①『つらい治療をやり抜く事にこそ希望がある』

『治療を諦めたら絶望しかない』という狭い考えは、いわゆるがん難民をつくります。

### ②まずは標準治療。ある時期まできたら、勇気をもって“治療をやめる”のも大切な選択肢です。

### ③今の時代、がんに伴う痛みは、在宅を含めてほとんどの医療機関で限りなくコントロールされます。

### ④そして、がんそのもので日常生活が制限される期間は案外短く、それまでの間は比較的安定した良い時間が持てることが多いものです。



現在においても、一部のがんは依然として有無を言わず我々の人生を中断することになるわけですが、それをも自分の歩んできた人生の1コマと捉えて、賢くやり過ごすというたかさも必要とされているのかもしれない。

さて、今回もわれわれのゲストとして御講演いただいた、野の花診療所の徳永進先生の著書の中に“臨床はボクシングに似ている”といった一節があります。

かかりつけ医の仕事はまさに、患者さん（病気と戦うボクサー）を支えるセコンドの役であるということなのだとは理解しました。

私達はホームドクターとして、あくまで患者さんと御家族の側に立って患者さんの生活を守る・・・

換言すれば、我々かかりつけ医の仕事というのは、患者さんが病気であろうとなかろうと“御自分の仕事をする”こと“御家族と過ごすこと”つまり“普通の生活”をサポートすることなのだろうと考えています。

